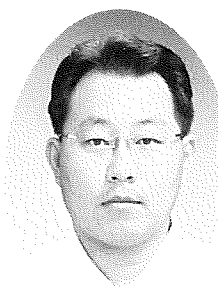


写真撮影提供 篠原龍氏

三重県神道青年会報 第23号

「不易なれ」

三重県神道青年会
会長 村尾 憲一



学生時代にご奉仕させていただいた神社で夜になると一升瓶を片手に「チョース」と宿舎に顔を出し、何くねなく面倒をみて下さった神職さんが、飲む程に酔う程に唱われた神主小唄なるものの中に「人工衛星が上がるうとままよ、変わる世間が変わらぬものは生まれながらの神主よ」というのがありました。私は生まれながらではないにしろ、変わらない世界にあこがれ、神職になって十八回目の春を迎えようとしています。

少年老い易く學成り難し
一寸の光陰軽んず可からず

「不易なれ」とは、先賢諸氏の活躍を見聞きして不安一杯の出発でした。幸い少ない人数とはいえ優秀な役員に恵まれ、一つ一つの活動もこなしてまいりました。一年目には、東海五県神道青年連絡協議会の担当県を受けたまわり、四回の協議会と九月には四日市市にて研修会も無事開催させていただきました。また、本年度は、皇大神宮ご鎮座二千年の佳き年にあたり神道青年全国協議会には、夏期セミナーを二見で開かれ、吾らも当地県ということ

から微力ながら参加協力をいたしました。

なんと申しまして、特筆すべきは、九月二十五日から二十九日まで行いました、「パラオ慰霊友好団」の海外慰霊祭であります。三重県神道青年会の歴史の中で、初めての試みでありましたが、先輩諸兄の多大なご援助をいただき、役員会員が一所懸命に取り組んだおかげで、すばらしい収穫を得ることができました。初めは何げない私の軽口から出たものが多くの人達の方で実行できたということでは組織の持つ強さではないでしょうか。

これからの神道青年会を考える時に会員の減少と活動力の低下が切実な問題となっておりますが、今回の慰霊友好団の行事を見ますと、皆の思いが一つになれば存分に活躍し結果は出せると信じております。

変わらぬものの伊勢の神宮さまも二千年の時を越えてなお鎮座ましまして、桜の花も季節たがわず花を開きます。我ら神につかえるものも、「流れて流されず」急激な時代の流れの中でも自分を失わず不易を守っていかねばと思いま

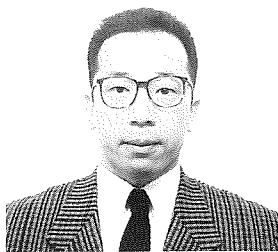


新入会員歓迎会の1コマ

す。来年度からの神青活動の益々の活躍を心より祈り上げます。

最後になりましたが、七年前三重県に参り右も左もわからない私に「おまえ理事になれ!!」と強引に導いていただいた山本行恭元会長と何くわぬ顔で仲間に入れていただいた神青の皆さま、今期私を下支えてくれた役員諸氏に厚く厚く感謝いたします。本当に良い勉強をさせていただきました。これからも初心を忘れずに変わらぬ世界を底辺で守ってゆきたいと思えます。どうも有難うございました。

二年間を顧みてる 副会長語る



副会長 伊藤 智
総務広報委員会担当

副会長に選出して頂いてから早いもので二年が過ぎ、今その任期を終えようとしています。

自分自身が「長」と名のつく器ではないことは十分に承知していましたが、それだけに成り行きとはいえ副会長になってしまったか

らには、他の人以上に頑張らないと会に迷惑かけると思い、自分なりに真剣に取り組んできました。

就任にあたり、自分は副会長として、何をすべきかを考え、三人いる副会長が、それぞれのスタンスを取ってゆけば、より円滑で効果的に会の運営が進むのではないかとおもいました。

副会長とは会則にあるように会のNo.2として会長不在の時は代理するのが職務です。しかし「副」を辞書で調べると

「ひかえ。次の」の意味のほか「つきそう。補佐。そえてたすけとする(もの)」とあります。自分

分は、才能あふれる村尾会長にびったりつき添ってたすけてゆく補佐役に徹しよう。それが自分の分相応の任であると思い、実践してきました。副会長を中心とした会と共に歩んだこの二年間は自分なりに大変勉強になり、今後の考え方に大いに活かしてゆきたいと思っています。

私は常々、神青会の活動は「個性、品性」(キャラクター)を磨き高める絶好の場だとおもっていました。

J・S・ミルは『自由論』の中

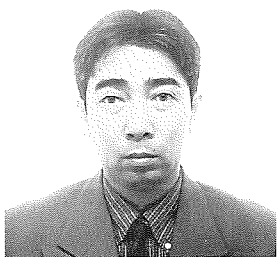
で「願望とか衝動が自分のものである人、そして自分自身の教養、その他によって発展せしめられ特徴づけられたような、その人自身の性質から出てくるような表現、そういうような人にはキャラクター(品性・個性)がある。欲求や衝動が自分のものでないような人、借り物である人にはキャラクターはない。それは蒸気エンジンにキャラクターがないのと同じことだ」と言っています。

そんな中で、今回の「パラオ慰霊友好団」の事業は、私にとってのキャラクターを高めるこの上ない絶好の機会でした。護国神社に奉職以来、宮司始め先輩より教えて頂いた事や、日々の社務の中でご遺族や戦友の方々と接し、体験し思った事などの積み重ねから、「海外戦跡において御英霊に対して若い神職心合わせて慰霊の誠を捧げたい」という抑え難い衝動や願望が心の底から沸き上がり、護国神社の神職として実務的に先頭にたって進めてゆき、これを会員が助け合い、皆の力で実現できた喜びは、まさにお金では買えない貴重で有難い体験でした。

会員が奉務神社で学んできた事や感じた事、それらを神青の仲間

と語り合い、今何をすべきか、何をしなければならぬかを考え、それぞれの得意の分野を活かし、明るく楽しく活動してゆく。そして、その過程が結果として自分達のキャラクターを磨いてゆき、さらには三重県神道青年会としてのキャラクターを高め、諸先輩から受け継いできた伝統を守ってゆくのではないのでしょうか。

この様な機会を与えてくれた事に対して深くお礼と感謝申し上げます。



副会長 村 睦
教化研修委員会担当

日ごろより、三重県神道青年会の行事活動に対し、ご理解ご協力頂き、心より御礼申し上げます。

二年間を振り返ってみれば、今期は、神宮式年遷宮も終え伊勢の地での神青協の中央研修も無事終了、対外的行事も、東海五県の研修会ぐらいと考えておりましたが、定例の行事を前期より少ない役員

数で、いかにこなしていかけるか多少の不安のあるはじまりでありました。五県研修会も四日市市で盛大に開催され、大盛況に収まり、また、終戦五十周年を迎え、三重県が南方の島国パラオとの友好提携を結んだこともあり、企画された慰霊団も無事に終わり、お宮の子供会が〇ー157により中止にせざるをえなかった以外今期も満了しようとしております。

平成七年度の総会に村尾会長が就任の挨拶にて「小数精鋭で行事を進めてまいります」の言葉どおりに進んでまいりましたが、近年、会員数の減少、会の活動の中



大きな収穫となったパラオ慰霊友好団

心となる役員数の急激な減少は、運営面に於いても、今後大きな問題となっていくと予想され、行事の見直し、組織の改革など、三重県神道青年会として、転換期を迎えております。



副会長 堀川孝雄

渉外福祉委員会担当

長い二年間が終わろうとしている。神宮神道青年会から県の神道青年会へ四名が参加させて頂いた。神宮は会員が五〇名近くの大組織。その中から四名という数は少ないような気もするが、この定数は慣例らしい。この二年間を通して、役員会その他の会に出席は、役員四名の内のほぼ二名。副会長という役職を頂いていたのも拘らず、出席率は半分にも満たない内容であった。

職務の関係で出られないことが多かった。特に昨年パラオの慰霊祭には、神宮からの参加者はゼロ。皇大神宮御鎮座二千年奉祝という大きな行事の最中だった。また伊勢の神宮会館で行われた三重県敬神婦人連合会定例総会に神宮からの助勢がゼロということもあった。この日は神宮神職の祭祀習礼の日と重なっていた。この二つは二年間の活動に於ける心残りである。

四年前にも県の神青会に参加させて頂いていたが、その時は今とは違い、役職のない理事として参加していた。その頃の経験があったので、二年前に副会長を任命されたときには、あまり考えずに引き受けていた。四年前当時同じ委員会に所属していた村尾さんが、今回会長になったということを知って、知っている方が会長ならば、活動しやすいであろうと考えた。しかし四年前と同じ気分であることは難しかった。副会長という肩書が付いたこと以上に、神宮からの四名の長になったことである。以前は上の方の命ずるままに役員会等に出席していればよかったが、今回は人選を全て引き受けなければならなかった。これが案外苦痛

であった。役員会であれば四名の中から二名を考えればよいが、大きな大会への助勢などは、殆ど一人で考えていた。今にして思えば神宮神青会会長などともっと相談すればよかったと思っている。

人選では苦労した反面、参加した行事は思い出深いものが多い。七年度のお宮の子供会は忘れえぬ行事の一つである。以前参加したときは二泊三日の行事で、子供も大人もくたくたになっていた気がしたが、今は一泊二日になり、多少体力的には楽になっていた。お宮の杜とはいえ、真夏の行事はそれなりにきつかった。八年度は食中毒騒ぎのせいで中止になったが、内心ほっとしたものである。

会員ニュース

《結婚》

- 平成八年 四月六日 喜田川宗之君・新婦容子さん
- 六月十六日 伊藤彰教君・新婦亜紀さん
- 七月七日 福岡哲司君・新婦幸代さん
- 九月二日 杉浦信良君・新婦ひとみさん
- 十一月三日 木本雅文君・新婦直子さん
- 十一月四日 山本行秀君・新婦真美さん
- 十二月八日 竹内 理君・新婦弘江さん

《出産》

- 平成八年 四月三十日 中谷俊昭君(二女) 仁美ちゃん
- 五月十七日 上坂省一君(長男) 宜嗣君
- 六月二日 中野雅史君(長男) 公平君
- 七月五日 石垣仁久君(三男) 仁識君
- 七月十三日 森 真吾君(三男) 晃三郎君
- 八月一日 藤林茂樹君(三男) 秀幸君
- 十一月九日 津村幸彦君(長男) 圭祐君
- 十一月二三日 久田哲也君(長男) 祥太君

平成九年

- 一月十日 長利文隆君(長女) 春香ちゃん
- 一月十七日 織田憲司君(次男) 伊純君
- 一月二三日 山路太三君(長男) 晃弘君
- 三月十五日 葦津健次郎君(長女) 公実ちゃん

定例総会

平成七年度定例総会が四月十九日神社庁会議室にて村尾会長以下役員、会員二十一名、来賓二名の出席にて開催された。

開会の辞に続き、神殿拝礼、国家斉唱、敬神生活の綱領唱和、会長挨拶の後、来賓の森本神社庁神道青年会担当理事、阿波氏子青年協議会会長より祝辞を頂戴し、その後伊藤副会長を議長に選出し議事へと移った。



まず会長より七年度会務報告、事務局より会計決算報告、監事より会計監査報告があり夫々承認され、続いて八年度活動方針案並びに事業計画案、同会計予算が審議されて承認を受け、定例総会は滞りなく終了した。

定例総会終了後、神社庁参事石上紀男・神社庁理事森本巖両先輩を交え座談会が開催され有意義な意見交換がなされた。



新入会員歓迎会

去る、六月十三日、恒例の新入会員歓迎会が新会員五名を含む二十六名の参加のもと開催された。会場となった津グラウンドボウルでは、東海五県ボウリング大会四連覇を果たした常勝メンバーと将又、とまどい気味の新人会員と入り交じり、村尾会長の始球式をもってスタートした。終始和やかなムードの中、ゲームは僅差を争う熱戦が展開され、大逆転の末、種村副会長が実に七年ぶりに栄光の座に輝いた。

ゲーム終了後、会場を神社庁に移し、親睦会を開催。久しぶりに王座に復帰した種村副会長の乾杯の発声により始まり、宴が進む中先ず、ボウリング大会の結果報告、表彰式が執り行われ、団体優勝の南勢地区に優勝トロフィーが、個人の部では各々、豪華賞品が村尾会長より手渡された。

宴たけなわの頃、親睦会恒例のゲーム、本年度は『目隠し物あてゲーム』が行われ、新入会員並びに役員と自己紹介を兼ねて、恐る

恐る挑戦、笑い、悲鳴等飛び交い、いっそう親睦気分も盛り上がった。ボウリングの疲れ、日頃の社務のことも暫し忘れ、楽しいひとときを過ごした。

会員夫々、来る九月の東海五県ボウリング大会五連覇の夢を胸に会場を後にした。

尚、ボウリング大会結果は左記の通りである。

団体優勝	南勢地区
個人優勝	種村 睦
新人賞	西園 佳代
ハイゲーム賞	西園 佳代
	福田 和人



親睦ゴルフコンペ開催

十月二十五日、会員親睦会ゴルフコンペが青山高原リゾートにて開催された。当日は、穏やかな日本晴。ゴルフにはたまらない絶好の日和に恵まれ、競技もイーグルやバーディーが続出する。ハイレベルな内容であった。

会場となった「伊勢見P・G・C」に集合したのは、村尾会長を始め、会員六名。それぞれ気に入ったクラブを手に、全員で一番ティールへ向かう。先ず、始球式を兼ねて打った会長の打球は、ピンそばは八〇センチのバーディー・チャンス。ずっこけを期待していた参加者に一瞬緊張が漂う。が、結局パーでカップイン。今回で二回目の親睦ゴルフコンペ。上達を称え合うなど、和気藹々のうちに十八番をホールインしプレー終了した。

結局、みごと二回のイーグルパットを決めるなど、終始冷静に自分のプレーをした、見並会員が優勝を手にした。

競技終了後は、場所を榊原温泉に移し、懇親会並びに記念品の贈呈式が催された。プレイの疲れを温泉の湯で癒し、更に懇親を深めた。

会務報告

- 〔四月〕
 - 六日 神社総代会定例総会
 - 七日 七名奉仕 神宮会館
 - 十八日 第四八回神青協定例総会
 - 三名出席 本社本庁
 - 十九日 平成七年度定例総会
 - 二名出席 本社庁
 - 三十日 三役・委員長会
 - 七名出席 本社庁
- 〔五月〕
 - 十六日 第一回役員会
 - 十二名出席 本社庁
- 〔六月〕
 - 七日 第二回役員会
 - 九名出席 本社庁
 - 十三日 新入会員歓迎会
 - 二十六名参加
 - 津グラウンドボウル・本社庁
 - 十七日 東海五県連絡協議会
 - 三名出席 熱田神宮会館
- 〔七月〕
 - 二日 第三回役員会
 - 十五名出席 磯部神社
 - 六日 第八回神社スカウト全国大会打合せ会
 - 二名出席
 - 三重県宮サンアリーナ
 - 十七日 皇大神宮御鎮座二千年奉祝行事打合せ会
 - 五名出席 伊勢国際ホテル

神宮大麻頒布促進運動

十二月四日(水) 県神青会員、神宮会員総勢十四名が員弁郡員弁町の金井神社(種村睦宮司)に、集合参拝し本年も、新興住宅地である西桑名ネオポリスに於て『神宮大麻頒布促進運動』を執り行いました。

今回で六回目を迎える当地での大麻頒布活動は例年になく穏やかな天候に恵まれ又、参加者の中に経験者も多く速やかに活動が進められました。

二名を一組として、五組にわけ夫々担当地区に分け神宮大麻、大麻、広報誌を持ち一軒づつ隈無く



廻りました。新興住宅地ということもあり留守宅が多かったが、在宅されている家庭では、会員が神宮大麻の事や、神棚について親切に説明をし、一軒でも多くうけて頂くよう努力をしました。

又、御札をうけられる家庭では、神棚拝詞を奏上し丁重に神棚に御札を納め来年も御札をうけて頂くよう心を込めて奉仕した。

本年は、毎年うけられる家庭は勿論、新規でうける家庭も増え、此の活動の継続性又地道な草の根的活動が実を結んできたような気がしました。

三重県神道青年会 神宮神道青年会合同研修会

去る二月二十七日(木) 県神道青年会の当番にて神宮会館を会場に恒例の「三重県神道青年会・神宮神道青年会合同研修会」が三十一名(県からは十二名、神宮よりは十九名参加)を得て開催された。

まず開会に先立ち県神青会村尾会長、神宮神青会榊坂代表より挨拶があり、引き続き、三重県神社庁参事石上紀男氏(神青協事務局長、県神青十代会長を歴任され



た我々の大先輩である。)をお迎えし、「神青五十年を迎えるにあたり」と題してディスカッション形式研修会が行われた。

同氏は、ご自分の歩んでこられた経験談、その時代背景等を語られた。そして、その時々合った方法・ニーズ性をもって一生懸命取り組み成就するという講話であった。

また神青関係に拘らず神社関係諸々質疑応答の時間も造っていた。だし、出席会員は有意義な研修会のひとときを過ごすことができた。

続いて、懇親会が催され、日頃の思いを語り合い相互の親睦を深めて無事に研修会のまくをとじた。

- 〔八月〕
 - 一日 第四回役員会
 - 十名出席 敢國神社
 - 七日 第八回神社スカウト全国大会奉告祭
 - 五名奉仕
 - 三重県宮サンアリーナ
 - 九日 東海五県連絡協議会及び教化研修会
 - 十一名参加 愛知県内
 - 十四日 第五回役員会
 - 十名出席 三重県護国神社
 - 二十五日 パラオ慰霊友好団
 - 三十九日 会員八名(総勢二十六名参加)
 - 敬神婦人連合会定例総会
 - 三名奉仕 神宮会館
 - 二十六日 皇大神宮御鎮座二千年奉祝行事
 - 八名参加 ホテル池之浦他
 - 二十四日 皇大神宮御鎮座二千年奉祝神社関係者大会
 - 十一名奉仕
 - 伊勢市観光文化会館
 - 第六回役員会
 - 九名出席 伊勢市内
 - 二十五日 親睦会
 - 六名参加 白山町内
- 〔十一月〕
 - 二十八日 第七回役員会
 - 八名出席 本社庁
 - 忘年会
 - 十一名参加 津市内

東海五県教化研修会

去る、九月九日・十日の両日、熱田神宮会館において「東海五県神道青年連絡協議会並びに教化研修会」が総勢一〇五名（本県からは村尾会長以下十名参加）のもと開催された。

九日、先ず連絡協議会が開会。そして、熱田神宮正式参拝後、開会式においては浅田愛知県会長の挨拶、御来賓の神社本庁総長・愛知県神社庁長、岡本健治様、更には神道青年全国協議会、北方会長より御祝辞を戴き、研修会へと移った。

研修会では、(財)日本気象協会東海本部参与服部満夫先生をお迎えし、「東海地方周辺の活断層」と題して、地震津波に対しての心得等、事細かに御講演戴いた。昨年起きた阪神大震災の計り知れない被害の規模は、忘れかけていた大自然の猛威と恐怖を我々に再認識させた。一同、少しでも知識を蓄えられればの思いで熱心に御講演を拝聴した次第であった。夕刻からは、東海の有志達と懇親を深めた。



一日目を終了した。翌日の親睦行事ボウリング大会では、各県「打倒三重」を目指し、熱戦が繰り広げられた。五県全県制覇の夢がかかった愛知大会であったが、岐阜県の怒涛の攻撃に屈し、惜しくも団体個人共、無冠に終わった。

ボウリング大会では敗れはしたものの、東海の仲間達と共に学び、共に過ごした楽しいひとときを満悦し帰路についた。

氏子青年協議会 三重県神道青年会合同研修会

平成八年三月十三日木曜日、伊賀上野に於いて、氏子青年協議会(氏青)との合同研修会が、開催されました。

本年は、神青氏青の相互の理解をより深めるべく、サンボウル上野にてボウリング大会が十五名の参加でゲームが進められ、氏青のメンバーには、七十年代のボウリングゲームの経験者も多く、年期の入った白熱したゲームが、展開され、一位、北山太加視(氏青)二位、阿波弘康(氏青)三位山本康紀(氏青)と、その他全ての賞を氏青のメンバーが獲得しました。その後、上野市内「千昇」に移り和やかに懇親会が進められました。次回の神青諸君の健闘を期待します。



〈十二月〉
四日 大麻頒布促進運動
十四名奉仕
西桑名ネオポリス

十二日 東海五県連絡協議会
三名出席 熱田神宮会館
〈九年一月〉
二十八日 第八回役員会
十一名出席 磯部町内
新年会
十二名参加 磯部町内
神青協臨時総会
一名出席 神社本庁

〈二月〉
二十七日 第九回役員会
十一名出席 神宮会館
神宮神青・県神青合同研修会
神宮十九名・県十二名参加
神宮会館

〈三月〉
五、六日 神青協中央研修会
九名参加 熊本市内
十日 第十回役員会
十二名出席 神社庁
十三日 氏青・神青合同研修会
六名参加 上野市内
十六日 三重県護国神社合祀祭
六名奉仕
十九日 東海五県連絡協議会
三名出席 熱田神宮会館
三十一日 『神葉』第二十三号発行
『神葉』増刊号発行

神青協中央研修会



平成九年三月五日・六日の両日にわたり、平成八年度神青協中央研修会が、火の国熊本ホテルキャッスルに於て行われた。当県からは、村尾会長を始め九名が出席した。総勢では過去最高の四五二名にも及ぶ同志達が集結した。

今回の研修テーマは「神事芸能の現在」ということで、午後一時、開講式の後、国立劇場芸能部長西角井正大先生を講師にお迎えし、基調講演を拝聴した。続いて、球磨地方一円の神社祭典で舞われる五穀豊穡・疫病退散等諸祈願の舞である球磨神楽が執り行われた。この地方独特の舞で興味深く拝見した。次に発題として、五人の発題者(球磨神楽保存会顧問工藤駿介先生・文化庁文化財保護部伝統文化課主任星野紘先生・㈱テレビ熊本制作次長宅野雄二郎先生・J

TB九州国内旅行企画販売部エース課長笠松晋先生・国学院大学日本文化研究所助教教授茂木栄先生)の講話があった。各専門分野からの鋭い神事芸能のとらえ方、又現在から明日へとつながる話には深く胸に刻み込まれた。午後七時から、全国の同志達との懇親会があり、久しぶりに会う友人達と楽しいひとときを過ごした。懇親会終了後は、熊本の赤い灯、青い灯の中に身を隠したことは想像に難くない。

翌六日は、二日酔いをものともせず、全体討論会に出席した。白熱した議論が飛びかい、内容の充実した研修となった。午後十一時半、全ての研修を終了し、参加者を代表して北方会長が修了証を授けた。次に、来年の開催県である千葉神青会長より挨拶があり、八幡参与による聖寿万歳にて二日間をわたる中央研修会は幕を閉じた。

この後我々は、熊本城見学・熊本県護国神社・藤崎八幡宮を参拝し、名勝旧跡を見つつ帰途についた。

神青協

皇大神宮御鎮座二千年 奉祝行事

十月十一日・十二日

皇大神宮御鎮座二千年の慶事にあたり、神青協でも共に神都伊勢の地に集い、青年神職として、如何に神宮を奉賛すべきかを考え、相互の研鑽を図ると共に、各地の特産品を奉納する事により、謹んで奉祝の意を呈する奉祝行事を行った。

第一日目に二見池の浦荘に全国より約百八十名が集結し、三重神青より八名が参加した。

神宮に対する認識をより高める為、『神宮御鎮座二千年の意義』中西正幸先生、『神宮大麻頒布の意義』藤岡重孝先生、『青年神職への提言』上田賢治先生とそれぞれについての講義を受けた。

第二日目には、早朝より、二見においてまず全員で禊を行ったが三重県が禊場の設営にあたり、禊の行法や作法についてより深いものをそれぞれに体得した。

次いで白衣白袴でそれぞれバスに分乗し、まず外宮に参拝し全国



神楽殿前にて各地よりの特産品を奉納する

皇大神宮御鎮座二千年を振り返り

倭姫命を偲ぶ

神宮宮掌 葦津 健次郎

昨年は、皇大神宮御鎮座二千年の記念すべき年ということから、

御鎮座に関わり深い倭姫命が注目され、皇大神宮別宮倭姫宮も大勢の参拝者で賑わった。日頃倭姫命を敬慕する我々神宮職員としては、そういう意味でも嬉しい一年であったと思う。

倭姫命は、第十一代垂仁天皇の皇女。御母は皇后日葉酢媛命であられる。我々国民には日本武尊の叔母として、また、尊が東国平定に向かわれる際、天叢雲劍（草薙劍）をお授けになり「慎みて怠ることなかれ」と戒め給われた方としてよく知られている。

倭姫命は、天照大御神に御杖代（みつえしろ）としてお仕えになり、大和国から伊賀、近江、美濃、伊勢等の諸国を巡られ、大御神の御神慮により現在の地、五十鈴の川上に皇大神宮を御創建された。

それが、昨秋から数えてちょうど二千年前のことである。

命は皇大神宮御鎮座の後、神嘗祭を始めとする年中の祭をお定めになり、これらに必要な御米や御塩、魚介類、野菜類、その他さまざまな御料品を調製するための神田や諸施設、神領を御選定された。また齋戒や祓の法を示され、禰宜、大物忌以下の奉仕者の職掌、神宮所属の宮社をもお定めになられた。神宮の祭祀、諸制度は、皇大神宮の御鎮座と共に、命によって確立されたのである。

また命は数多くの御教えも宣り下されており、これらは代々神宮神職の奉仕の指針となり、今もなお語り継がれている。

この命の御功績を仰ぎ、中世には有名な『倭姫命世記』が編纂された。また、尾上社（おべのやし）等で倭姫命をおまつりしたと

のである。

神宮は御鎮座以来絶えることなく、伝統ある祭りを繰り返してきた。神嘗祭を始め、年間千五百回を数える大小の祭典。これらはいずれも日本のあるべき姿、極言すれば天照大御神が示された三大神勅、「宝鏡奉斎」「斎庭の稲穂」「天壤無窮」の神勅を主とする、国家国民のための祈りである。この祭りを倭姫命がお定めになり、我々の祖先は二千年の間、その伝統を護り続けてきたのである。

言い換えれば、倭姫命のお蔭によって、神代の祭りが現在も継続されているのである。倭姫命のお力は、計り知れないものである。

神宮は二千年の時を経て、伊勢の風景、日本の風景に溶け込んでいる。我々日本人には、まるで違和感のない、空気のような存在である。

我々は、空気の大切さを漠然と知っている。しかし普段はあまり考えていない。

多くの人々が、神宮の祭の重要性を漠然と知っている。しかし、日頃は気にもかけずに生活しているのではないだろうか。

皇大神宮御鎮座二千年は、我々にとって神宮の祭祀の重要性、日本のあるべき姿と共に、倭姫命の御功績をあらためて考えさせる貴重な機会であったと思う。

我々は「日本のあるべき姿」を子々孫々に至るまで、護り伝えなければならぬ。このとき我々をお譲りいただけるのは、倭姫命のお力だと私は信じている。

年明けて、皇大神宮御鎮座二千年の今年も、老幼を問わず、大勢の善男善女が倭姫宮にぬかづいている。

会報「榊葉」

第23号

平成9年3月31日

発行者 村尾憲一

編集 総務広報委員会

発行所 津市鳥居町210-2

三重県神社庁内

三重県神道青年会